

大学との協力・連携の意義と課題

伊東 祐之

新潟市歴史博物館と大学との連携・交流について考えるといくつかの側面があると思います。まずは、当館の設置目的の一つである「歴史を媒介とした市民交流」の一部であるということ、次に教育機関としての大学との関係では、大学における人材育成への協力、あるいは大学生の文化財保護や博物館への理解を深める教育の推進ということ、また、研究機関としての大学との関係では、当館の多方面にわたる活動への専門的・学問的な協力あるいは当館学芸員との共同研究などが考えられます。いずれの連携・協力も当館の活動の深さに広がりをもたらすものであり、その充実が館活動にとって重要なものと位置づけられます。当館での大学連携・交流の実際と課題について具体的に述べてみたいと思います。

平成二十一年(二〇〇九)年、当館は「哈爾濱金代文化展—十二世紀の中国、北方の民族が建国する—」という企画展を開催しました。これは新潟市とハルビン市との友好都市提携三十周年を記念して、新潟市が提案し当館が独自

夫教授・飯島康夫准教授でした。両氏は、博物館学芸員として大先輩にあたり、開館時には多忙を極める当館学芸員のために陣中見舞いに来館していただきました。その両氏から新潟大学で博物館学芸員を志す学生に、館運営の現場にいる学芸員から、机上の理屈ではなく具体的な事例によって博物館論を講義してほしいとの依頼を受けて開講しました。「博物館学概論」受講済みの学生を対象に、後期に十三回五コマ分二単位の講義です。学生数は年によって多少があり二〇〜四〇人ほどで、人文学部・教育学部・理学部などの所属でほとんどが三年生です。学芸員が交代で調査研究や資料保存、展示製作、教育普及活動など、様々な館活動について話しています。その内容は学芸員によって差はありますが、実態をかなり赤裸々に述べていて、当館がめざしていることと同時に、実現できていないことや問題点なども話しています。授業の最後には毎回、受講票を記入してもらっていて、それには学生の質問や感想が記されています。その辛辣な指摘に講義内容の不十分さを知ったり、建設的な提言に館のあり方を考えたり、新たなヒントを得たりしています。この授業で当館の学芸員は、学生から様々なことを学んでいますし、講義することを通じて、館の運営や自分の活動を検証する機会となっ

に企画・実現した事業で、ハルビン市の金上京歴史博物館の所蔵品を借用し展示しました。当館には金の歴史はもちろん、中国史を専攻する学芸員もいませんが、担当者は、金など中国史関係の文献を読み、金上京歴史博物館へ足を運んで学芸員の話聞き、所蔵資料を調査し、どうすれば金の建国と女真について日本に伝えることができるのか、どうすれば金上京歴史博物館の仕事をよりの確に紹介できるのか考えました。しかし、限られた期間では限界があります。そこで事業を進めるために新潟大学人文学部東洋文化史研究室に相談し、同大超域研究機構(現研究推進機構超域学術院)准教授佐藤貴保氏を紹介していただきました。佐藤准教授には、企画展内容についての助言や関連した講演、図録の原稿執筆だけでなく、全国の金史の研究者が集まる「遼金西夏史研究会」を、新潟市で企画展に合わせて開催していただき、当館は同会と共に市民向けのシンポジウムを開催することができました。当館が大学の協力を仰いで行った事業の一例です。

ています。

しかし、当館の調査研究や企画展示を深める専門的研究の面では、大学研究者と協力・連携する活動は低調です。当館が明らかにすべき調査研究の課題あるいは展示や教育普及活動などについて大学研究者と共同研究したり、監修を受けたり、助言を受けたりするような協力・連携はほとんどありません。今まで行われてきた調査研究面での協力も、臨機で場当たりのものがほとんどであり、計画的な事業となっていない。

この原因には、大学と博物館という機関の目的・方法・性格が異なること、もあると思います。当館にとっては、

館員の個人的なつながりもあって、当館は特に新潟大学と様々な協力・連携活動を行ってきましたが、ここでは他大学との協力・連携もふくめて列挙してみよう。

開館前でしたが、新潟大学人文学部の民俗学実習の授業で、学生に当館が引き継ぐことになっていた新潟市郷土資料館所蔵資料の付票付け替えを、当館学芸員とともにしました。当館の資料管理の基礎となっていた仕事でした。開館後には、それぞれの専門研究の成果を、新潟大学・新潟県立短期大学(現新潟県立大学)などで講義している学芸員もいますし、当館で講義を担当している授業もあります(後述)。

また、長岡造形大学や新潟大学では、当館の展示や施設・建築などを見学する授業も毎年行われています。全国の大学での博物館学や都市計画などの講義で、当館の展示や資料を調査してレポートを仕上げる課題が学生に与えられ、学芸員や司書が学生に対応することもあります。学芸員資格取得に必要な館務実習は、毎月一回二日間通年で行う実習と、夏季休暇中に二週間



当館でのミュージアム論講義



遼金西夏研究会との共催シンポジウム

行う実習の二種類で、全国の大学生を受け入れています。

自治体史や既存の図書で紹介されている当館の所蔵する資料を手掛かりに、資料の閲覧・複写する大学研究者がいます。大学研究者の紹介で資料が当館に寄贈されたこともありますし、美術資料の購入にあたり大学研究者に作品を検討してもらったこともありま

新潟大学が中心となって組織した新潟歴史資料救済ネットワークの活動に当館もかかわってきましたが、昨年の震災に際しては新潟大学が実施した文化財レスキューに当館学芸員が参加しました(「帆橋成林」25参照)。

このような協力・連携のなかでも、当館が新潟大学で開講している「ミュージアム論」という授業は、当館にとっても大きな役割を持っていました。館を指定管理者として運営する新潟市芸術文化振興財団が新潟大学人文学部へ寄附する講座という形式で、平成十八(二〇〇六)年以来、新潟大学で開講しています。この寄附講座を提案してくださったのは人文学部の池田哲

個別の研究者と研究課題を深めて専門的な研究をするというよりも、多くの人々との交流の材料となる事柄について広く調査することの方が優先されてしまおうという問題があります。また、直近や一年後の担当企画展の調査研究・展示準備に追われ、大学研究者と共同課題を見出すような日常的な共同の資料調査や資料検討会、研究会などを組むことができないのです。

これらの課題の克服は必要です。当面は、互いの調査研究の成果を公表し合って、その中からそれぞれの関心から汲み取るべきことを汲み取る作業が大切です。そこで共同調査・研究ができる素材が見出せたらそれを一緒に育

ていく活動ができると思います。そのためには、研究成果を論文として公表している大学研究者から一方的に成果を受け取るだけでなく、博物館も館の学芸員もその所蔵資料や日常的な調査研究の成果を広く情報発信して、大学研究者はもちろん多くの市民に知ってもらう必要があり、その成果をもとに交流していく必要があります。そうすることで個人のつながりに頼らず、新潟大学以外の大学研究者とのつながりも深まると思われます。

みなとびあが大学との協力連携を一層進めるためには、当館の調査研究活動を盛んにするとともにその成果を広く公開してゆくことが必要です。基礎となる資料の収集保存や調査研究、展示、情報集積と発信など館の主体的な活動の充実を図ることが、館を協力・連携・交流の場として発展させる基礎なのです。ここでは大学との協力・連携を例に考えましたが、当館の設置目的である「歴史を媒介とした市民の交流」をより発展させるためには、「新潟市域の歴史的特性を明らかに」するという設置目的を実現する、みなとびあがの主体的活動の充実が不可欠なのです。

(いとう すけゆき 副館長兼学芸課長)